

なりたの昔話

第13回

このコーナーでは、昔から語り伝えられてきた成田の昔話や伝説などを掲載しています。

【参考文献】コミュニティ成田No.23(1988年4月発行)

鳥見塚

今からおよそ550年ほど前の話です。

南羽鳥村に1羽の怪鳥が現れ、子どもたちを襲っては食べてしまうことが、たびたび起こりました。困り果てた村人たちは、村の熊野神社の神主鈴木豊教に怪鳥の退治を頼みました。

豊教は力も強く、いろいろな武芸に優れていましたが、怪鳥を捕えようとして、けがをしてしまいました。

そこで、二男の教将が代わって退治することになり、村人300人余りと一緒に出かけました。村の中や外まで行って怪鳥を探し求めましたが、どうしたことが怪鳥の姿はなかなか見つかりません。

教将には2人の娘がおりました。ある日、この2人の娘が父親のところへ来て、こういいました。

「大勢の大人たちが、武器を持って怪鳥を探しても、怪鳥は用心して出てこないでしよう。子どもをおとりにして、怪鳥が現れたところを飛び掛ければ、きっと捕まえることができるに違いありません。おとりは私たち2人にやらせてください」

教将は、娘たちの覚悟を大変喜び、この方法に従うことにしました。

そして、村人たちが隠れている所で、2人の娘は鎌を手に、歌いながら草を刈りました。3日後、ついに怪鳥が現れました。

2人をねらって、素早い速さで降りてきます。妹が怪鳥の鋭い足に捕まってしまいました。しかし、姉が妹を助けようと手に持っていた鎌で戦い、怪鳥を傷付けたので、たまらなくなった怪鳥は妹を放して逃げ去りました。その後を教将と村人たちは追いましたが、とうとうとり逃がしてしまいました。

「なんとということだ、娘にけがまでさせて、失敗してしまった」

がっかりした教将が矢をしまったところ、突然怪鳥が現れ向かってきました。教将は、また矢を取り出し、ヒューと矢を放ちました。矢は見事に左の羽に当たり、怪鳥は地上に落ちました。けれど怪鳥はなおも向かってきます。教将は矢を捨てて組み伏せ、そこへ駆け付けてきた村人と共にようやく退治することができました。

この怪鳥は、よく見ると鷲の大きいもので、羽を広げると2間(3・6メートルほど)もの長さがありました。

怪鳥を埋めた塚を鳥塚と言いましたが、いつのころからか鳥見塚と呼ばれるようになりました。



編集後記

5月26日の酒フェスティバルでは、7銘柄が出品されました。30年以上前の話ですが、世は地酒ブームの最中。火を付けたのは「幻の酒」として有名な新潟の銘柄でした。全国の地酒をそろえた居酒屋で初めて口に含んだ瞬間、淡麗辛口のさらりとした飲み口に目からうろこが落ちる思いでした。その店では、県内の蔵元が醸造した古酒も知り、幻の酒とは真逆の濃厚な味わいが、日本酒の奥深い世界にはまるきっかけになりました。

平成25年6月15日号 No.1245

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。